華の箱庭

真羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
華の箱庭

【Ｎコード】
Ｎ２８４８Ｏ

【作者名】
真羅

【あらすじ】
中学三年の夏、同じ会社で共働きしている両親が突然の海外赴任に…
華南は、日本に残ると言いついて行く事を頑なに拒んだ。
一人娘を家に置いておくわけにはいかない。けれど、娘の意見も尊重したい。
地元の寮付き高校は超がつくほどのお金持ち高校で。。。
でも、ひょんな事から、特待生の推薦状が彼女の元に届いた。

一話（前書き）

ｋｅｙ：すれ違い，身分差，嫉妬，腹黒

中学三年の夏、同じ会社で共働きしている両親が突然の海外赴任に…
華南は、日本に残ると言い着いて行く事を頑なに拒んだ。
一人娘を家に置いておくわけにはいかない。けれど、娘の意見も尊重したい。
しかし、寮のある高校は超お金持ち高校で…
でも、ひょんな事から、特待生の推薦状が彼女の元に届いた。

▽不動　馨〈ふどうかおる〉
旧図書館に、いつも居る美丈夫。

▽花園　華南〈はなぞのかなん〉
優秀な割に少しぬけている。中々お金持ち学校に馴染めず悩んでいる。

▽吉住夏美〈よしずみなつみ〉
華南を可愛がるお姉様的お嬢さま。

▽松田陽平〈まつだようへい〉

クラスのムードメーカー的存在

▽澤田冷夏〈さわだれいか〉

私立学校一の美人

▽太刀川啓〈たちかわけい〉

私立学校の代理理事

一話

特待生として入学し、半年は過ぎようとしていた。

日本でも有数の超お金持ち学校の、この私立校は大企業の令息令嬢やどこそこの家元とか…普通に生活していたら、まずお目にかかれないであろう人達と毎日顔を合わせて学業に励んでいる。

そんな人達が居る高校での話題は、やっぱり一般庶民には理解出来ない話ばかり。

「ドバイに新しい別荘を購入しましたの。秋休みにご一緒しませんか？」

華やかな容姿と、モデルのような体躯を兼ね備えた世界でも名を轟かす電気メーカーの令嬢は、突然教卓に立ちクラスメイトに声をかけた。

「おっ！いいねぇ。それなら俺ん家の自家用使う？」

そうノリよく答えたのは、父親が航空会社を経営する男子生徒。

一クラス十五人と少人数制な為に、割と仲が良い。

「華南は、どうします？」

ふわりと髪をなびかせて甘い香りが漂ってきそうな彼女――――吉住夏美は、腰に手をあてがいニッコリ微笑んだ。

周囲を見渡すとクラスメイト達は既に、彼女から招待状を受け取り、喜びの声をあげていた。

「夏美…あの…えっと…」

しどろもどろになる華南を見て、彼女は微笑んだ。

「はい華南。旅行代金なんて気にしないで。私達の仲じゃない」

華南の手を掴みポンと、手渡した高級感溢れる招待状。

「でっでも！」

「いいから。楽しみましょう？」

「よっし。じゃあ俺達の分も吉住が負担？！」

「そーんな訳ないでしょ？あなたがたにはきちんとお支払いして頂きますから」

華南は、たじろぎながら握らされた招待状を見つめた。
それから直ぐに、次の授業が始まるチャイムが鳴り響き生徒達は、自分の席に座っていく。
この非日常的な学校生活も半年は過ぎた。
未だに馴染めきれていない自分がいる。
馴染めるはずないんだ。

「華南。ランチに行きましょう」

午前中の授業が終わって、クラスメイト達はぞろぞろと食堂へ向かって行く。
夏美が、いつも通りわたしを誘ってくれる。

「あっ…と、今日もお弁当持って来たの…だから」

「そう？それなら仕方ないわね。じゃまたね」

ここの食堂で出される昼食は、一流ホテルのシェフが作っていると

かでフレンチから中華までバリエーションは様々。値段も、破格。
勿論、華南には高額な昼食代を支払う余裕などない。
しかし、入学当初は昼食がフレンチだの中華だの食事代が高額だなんて知らなかった。
食堂の入口で固まっている華南に声をかけてくれたのが吉住夏美だったのだ。
その日は、昼食代を支払ってくれて後日代金を夏美に渡したのだが、気にしないで。の一点張り。その頑固さに根負けしてしまって渡せず終い。
そんな事を、ふと思い出して頬が緩んだ。

鞄からお弁当を取り出して、机に広げる。
朝早くから、自身で作ったお弁当。こっそりバイトして稼いだお金で食材を購入して毎朝作っている。
寮にキッチンがついていて本当に助かったのは、華南だけであろう。

この私立校の特待生は、華南の代から始まったもので常に上位三番内に入っておかなければならない。
ノルマは厳しいかもしれないがお金持ち学校なので大多数は、お金を払って入学しているようなもの。真剣に勉強をしているものなんて一握りしか居ない。

「ご馳走さまでした」

ボソッと呟いた事が静まり返った教室に虚しく響いた。
昼休みは、一時間程。結構曖昧だったりする。

「あっ…そういえば…特待生には秋休み課題があったんだっけ」

国語科の教員に呼び出されて言われていたことを思い出して、足早

に教室から出た。
課題は、四百字詰め五枚の読書感想分。早いこと、本を探して読んでおかないと旅行が控えている。
それまでに仕上げなければいけないのだ。

初めて見たのは、赤信号で停止した車の中から。
黒い髪を高くに結わえたポニーテール。
活発そうなその髪型とは裏腹に、控え目がちな彼女に目を奪われた。
ドラマでありきなその光景。
横断歩道で人の波に呑まれて、通行が困難になっている老婆。
最初彼女は、老婆に気がつかなかったが、何を思ったのか自分が今歩いて来た横断歩道を振り返った。
信号が青から赤に変わる点滅に未だ中間地点に居る老婆に気が付いたようだ。
彼女は、慌てて老婆の元へと駆け寄って行き、何とか渡りきった。
俺は、ハラハラしながらその様子を見てホッと溜め息を零した。

「見ていましたか」

運転席でハンドルを握る青年は、振り返る事なく告げる。

「あの制服は…」

俺は、気になって尋ねてみた。

「あぁ…あれは市立第一中学校の制服ですよ。タイが紺色なので三年生でしょう」

「やけに詳しいな…」

「職業柄、イヤでも覚えますよ。貴方も少しぐらい…」

「俺には向いてないのかもなー」

「子供みたいに…」

クスッと、運転席の男は笑い車を発進させた。

「あの子…」

「珍しく気になって仕方ないって感じですね」

不意にそう言われて、窓際に肘を置いて景色を見ていた後部座席の男は、表情を固まらせた。

「まさか！俺が」

「嬉しい限りです。こちらで手配は打っておきます。とっておきの好条件で」

男は少し考える素振りをしてから小さく頼むと答えた。

ガタンっ。

あまり人が来ない、旧図書館。
新設された図書館より蔵書数が半端なく種類が多いので、土日曜日には近隣住民に開放している。

それなのに、今の物音は何だ？
低めの本棚に長い脚を伸ばして、柱を背に体は閉まった窓際にあずけて座っていた青年は少し顔をしかめた。
閉じていた目をうっすらと開けると、高い場所にある本を取ろうとしているのか、長い梯子を華奢な体で移動させようとしている女子生徒の姿が見えた。

「んっしょ…」

梯子が床を引きずり嫌な掠れた音が響く。
そして、足を引っ掛けてしまいフラリと崩れ倒れてしまった。
見ていた青年は、本棚から飛び降りると女子生徒の元に駆け寄った。

「大丈夫か？」

梯子の下敷きになっている女子生徒を助け起こした。
立ち上がらせて、青年は梯子を掴む為にしゃがんだ。
無反応な女子生徒を不審に思い、見上げると彼女は驚きの表情。

「…何？」

「えっ…あっ…その人が居るなんて、びっくりして…」

「…」

たどたどしく言葉を紡ぎ、それからハッと改めてお辞儀をした。

「あの…助けてくれて有難う」

手首にかすり傷を作り、それをさすりながら彼女は言った。

「手首…」

「大した傷じゃないから…。あっ…私服…って事は三年生?!」

今まで先輩に馴れ馴れしくしゃべっている事に気がつき恥ずかしくなった。
この私立高校は、割と上下関係は厳しい。
ピンクのストライプが入ったパーカーとラフな格好の青年。
しかし、目の前の彼は完璧に着こなしている。

「気にしなくていい…それより…」

青年は、華南を見てから華南が取ろうとしていただろう本棚を見つ

めた。

「古典文学…」

「あっ…はい。わたし、特待生で秋休みの課題が出てるんです」

ガションとレールに梯子を引っ掛けて、青年は上って声をかけた。

「どれを読むんだ？」

「伊勢物語です。その中の筒井筒を題材にしようかと」

「趣味が良いね。俺も好きだ」

「そうなんですか。わたしも、この物語好きです。妻が他の女のところへ通っている夫の身を心配して読んでいる句。切ないですよね」

パラパラと本を捲ると、あまり触れられていない為か古い本独特のカビっぽい埃臭い匂いがした。

持っていた本をヒョイと青年に取られた。

「そうだな。幼なじみと言う設定も、馴染みやすいしな。まぁ…大団円で終わるから安心して読めるな」

「はい。悲恋はちょっと苦手なんで」

沈黙を呼び、旧図書館がより一層静かになった気がした。

「あっ…あの…」

華南は、背中に流れる嫌な汗を感じながら、笑みを絶やさず声をかけた。

青年も負けじと、極上の笑みを零す。

「俺もこの本借りたい」

一瞬、目の前の青年が何を言ったのか理解出来なかった。

「っっはぁぁあっ？！」

その声は、旧図書館周辺にまでも響き渡った。

いやだ華南、そんなに息を切らせてどうしたって言うの」

本鈴と同時に教室へ飛び込んだ華南を見て夏美は、少し驚いたように言った。

何せ、今まで華南が本鈴と同時に教室へ入って来たことなんてなかった。

常に五分前行動をしていた。

「ん…ちょっと、ね」

そう言って誤魔化す華南を不審に思った。

「そう？ならいいのだけれど」

夏美は、それ以上何も追及せず午後の授業を受けた。

「どうして、そんな意地悪するんですか」

わたし、課題で使うって言ったのに。

凄く良い人だと思ったのに・・・

「誰も見せてあげないなんて言ってないだろう？共有しよう」

「…どういう事ですか？」

「俺は毎日ここに居る。課題、したくなったら来いよ」

優しくみえた青年が今は、ひどく意地の悪い微笑みを零す青年にしか見えなかった。

「そうそう、俺…不動馨」

予鈴が鳴って、落ち着かない華南に向かって青年は――――…不動馨と、そう名乗った。

「…動…馨…」

「華南。授業、終わったわよ」

ぼんやり霞んだ目。

次第にそれが、ハッキリしたものを映して、華南はガタッと椅子から落ちそうになった。

「夏美…」

腰に両手を当てて仁王立ちしている夏美が居た。

「もう帰り支度始めてるわよ？」

「えっ」

キョロキョロと周囲を見渡すと、確かに生徒達はもう帰り支度を終えて教室から出て行っている。

「私は、お稽古があるので遅くなると、寮長にお伝え出来て？」

「あっ…うん。言っておくね」

「それじゃあ華南、寮でね。旅行の打ち合わせもしたいの」

ロッカーからヴァイオリンの入ったケースを持ち出した夏美を見送って華南も帰り支度を始めた。

二話

ピンクのストライプが入ったパーカーを脱ぎ捨てて白い革張りのソファの上に投げた。
横目に入る範囲内で簡易テーブルの上にノートパソコンを広げてカタカタとリズミカルな音を出している男性。
「今日、偶然会った」
「誰にですか？」
男性はノートパソコンを打つ手を止めず、視線もディスプレイを見続けたまま答えた。
「知っているクセに俺に言わせるのか？」
「…花園華南さん…でしょう」
「あぁ」

あの時、彼女にあのまま伊勢物語の本を渡していたら課題を終わらせるまで二度と旧図書館になんて足を運ぶ事などないだろうと思った。
だから、あの本は俺がワザと彼女から奪い取った。
少しでもいい…彼女と何か繋がりを持ちたくて。
彼女は、理解できない。と言った顔で憤っていたが。
思い出しただけでも顔が弛んだ。
彼女でも、あんな表情をするんだと。

否、彼女だからこそ…ああいう生きた表情が出来るのだろう。
ここは、お金持ちが集う高校。やはり親の教育などで型にはまったタイプの人間しかいない。
面白味に少々欠ける。
そんな中に居る自分は、やっぱり彼女を自然と求めてしまうのかもしれない。

「何をにやけているんです」

やっとこっちを向いた男性は、仕事が終わったらしく、ノートパソコンをハードケースに直し終えていた。

「俺…完璧一目惚れだなって…」

「…普段、あなたを知ってる人から見たら、さぞかし間抜けに見えるでしょうね」

「何とでも言えばいいさ」

――――――

夜、二十一時を過ぎた頃。

華南の部屋を、遠慮がちにノックする人がいた。

「…華南？夜分遅くにごめんなさい」

夏美の声に、座椅子から立ち上がりドアの鍵を外して開けた。
二十一時を過ぎると、自室から出てはいけない。
所謂、就寝時間だから。
見つかると一ヶ月間、寮内の清掃をしなければならないのだ。令息令嬢からしたら屈辱以外何でもない。
そんな、ある意味危険な行動を夏美はやっている。
その為か、日中よりやや声は抑えているようだ。
何故そこまでして、来たのか疑問に思いながら華南は夏美を部屋に入れた。
雰囲気的に、帰り際に言った旅行の話ではないような気がした。

「ねぇ華南。私は貴女を数少ない友人だと思ってもいいのかしら？私は、この学校に入学して華南と出会って半年、そう思っていたのだけれど」

先ほどまで自分が座っていた座椅子に夏美を促して、華南はフローリングに三角座りになった。

「えっ…」

唐突に切り出されて、反応が鈍る。

「華南は、私達と違って一般の特待生枠で入学してきたでしょう？だからかしら…ずっと距離を置いている気がするの。私だけじゃなくクラスにも」

「…それは…わたしが、お金持ちでも何でもないし…場違いなのはわかっているんだけど」

こればっかりは…
寮がある学校は、県内にもここだけ。しかも、運良く自宅があった場所から近くて荷物の運び出しも自家用車で出来た。
極力出費を抑えたかったたし、何より特待生は成績をある程度キープしていれば授業料が全額カットになる。
流石に備品消耗品は自己負担だが。

「ずっと場違いだなんて思っていたの？」

こっくりと華南は、小さく頷いた。
「場違いだなんてとんでもないわ。所詮、お金持ちなのは親であって私達じゃない。華南と何ら変わりないのよ。それに皆さん、華南と話をしたくてうずうずしているのよ？」
けれど、貴女は誰からにも喋りかけて欲しくない。って壁を作ってしまうから。
と…夏美は目を細めて柔らかく言った。
「それにね、松田陽平…華南の事を気になっているみたい。旅行の話も凄く嬉しいって五月蝿かったんだから」
松田陽平…父親が航空会社を経営している…。そう、確か自家用ジェットを旅行時に出すとか言っていた。
「華南、顔赤いわよ？もしかして照れてる？」
「うっ…」

どうやら図星だったらしく、更に顔が火照りだしたのがわかった。

「うんうん！私、こう言う語らいを夢見ていたのよ！仲の良い友人と恋愛話を展開する！何て素敵なのかしら」

興奮気味に、声高らかに語り出す夏美に昼間にあった嫌な冷や汗が流れた。

嫌な予感がした。

「そう落ち込むなよ」

「そうよ。タイミングが悪かったんだから」

クラスメート達は、口々に慰めの言葉を二人に投げかけてくれた。

あの夜、騒がしいと寮長が華南の部屋に訪れたのだ。

言い訳をする事もなく見つかってしまった。

「寮内規定は、きちんと読みましたか？就寝時間は二十一時。破った場合は、罰則として一ヶ月間の寮内清掃でしたね！」

「そう言う訳でして申し訳ないのだけれど秋休みの旅行は貴方達で楽しんできて…私と華南は一ヶ月間、寮内清掃をしなければならないので」

「えっ！？」

夏美の言葉に、クラスがざわめいた。

「夏美の所の別荘だよ？夏美なしで行けないわ」

「そうよ。それなら、今年の秋休みは中止でよくない？」

「そうだな。俺達には、まだ後二回秋休みがあるんだもんな」

「うんうん。それに何も秋休みだけが休みなわけじゃないですし」

クラス中が妙に納得して、結局今回の秋休みの旅行は中止になった。

「ごめんなさいね、華南。あんな時間に無理して行ったのがダメだったのね」

休み時間になり、夏美が華南のところにやって来て昨夜の事を謝罪した。

一応、部屋に招き入れたと言うことで華南も連帯責任になった。

「気にしないで。それより夏美が掃除なんて…大丈夫？」

「ええ、問題ないわ。掃除くらい。でも確かめたかったの。私達との壁が少しでも崩れた形で旅行に行きたかったから…」

小首を愛らしく傾くて言い、それから悪戯っぽく付け足した。

「華南に心を開いてもらえるように今日も華南の所に行く予定でしたのよ」

「どうしてそこまでするの？」

「理由なんてないわ。でも私がしたいの。それだけじゃ理由にならない？」

華南は、苦笑して首を振った。

「ありがとう」

そんな二人の会話を遠目から聞いていたクラスメートは、ワッと集まって来た。

「お前ら朝っぱらからクサい青春するなよ」

「夏美、素敵よ」

茶化したり、素直に感想を述べたり。

昨日とは打って変わってクラスの雰囲気が良くなったのが華南にもわかった。

ーーーーーーー授業の合間にある休憩時間も終わりを告げて生徒は、自分の席につく。

それと同時に、教科担当の教員が入って来て授業が始まった。

あっ…秋休みの課題。
次が昼休みになるが別に急いでする必要なくなったんだよね。

不動馨…

切れ長で漆黒の瞳と何物にも染まらない髪。
しなやかな四肢は、まるで黒豹のようで…
あの人に助け起こされた時、驚きとは違う何かが高鳴った。

『俺は毎日ここに居る。課題、したくなったら来いよ』
脳内で反復するハスキーボイスに体がピクリと震えた。
行ってみようかな。脳裏に、そんな言葉が浮かんだ。

「あれ?華南、今日もお弁当?」

机に広げられた、華南の昼食を見て夏美が言い華南はコクコクと頷いてみせた。

「そう…それなら私、プレートに盛ってもらって教室でとるわ」

「えっ…」

夏美の思わぬ提案に、華南は表情が固まった。
早く昼食を済ませて会いに行きたかった。しかし、夏美と一緒に昼食をとるとなると、休憩時間ギリギリまで会話が繰り広げられる

だろう。
そんな事が毎日続いたら、課題が出来ない！
「なぁ〜に？私じゃ不服？」
笑いを含んで、夏美はおどけたように言う。
ここは、やっぱり正直に話した方が良いよね。
「あのね夏美。実は…」
昨日の昼休みに課題の読者感想文で使う本を旧図書館に借りに行った事。
そこで三年生の男子生徒に梯子の下敷きになったところを助けてもらった事。

そして

「へぇ〜。だからあの時、華南珍しく本鈴で入って来たのね」
「うん」
「本、取ってもらったのに奪われてしまったのよね？」
「共有しようって。課題したかったら昼休みに来いって」
「名前、何だったっけ」
「不動馨って言ってた」

「…本人が言ったの？」

華南は、えっ？と不思議そうな眼差しをしてから頷き夏美は、その名前を聞いて眉間にシワを寄せて何かを考えている風だった。

「…そう…不動馨…ね。華南、それじゃあ私は課題の邪魔をしてはいけないわね。食堂へ行ってくるわ」

早口でまくし立てて夏美は、教室から飛び出して行った。

ーーーーーー

不動馨ですってぇ！？
華南…貴女、大変な人に目を付けられたわね。
あの様子じゃ、華南は知らないみたいだし。
夏美は、この学校の紛らわしい制度に毒づいた。
一、二年生は制服着用。しかし三年生は私服でも可という制度。
不動馨…バレた時、何て説明するのかしら？
私の元婚約者さん。

ギィッと古びたドアが、擦れて嫌な音を発した。
背中にさんさんと眩しい陽の光を浴びて眠りにつく不動馨。

あの狭い本棚の上で、大きな体を器用に乗せている。
不動が居る本棚近くのテーブルの上に伊勢物語が置かれていて華南は、そちらに歩みを進めた。

「…」

ここに来て、彼とこの本を共有?
眠っている不動馨が近くに居ると意識してしまい今にも心臓が破裂しそうなくらいなのに…。彼が目を覚ました時、わたしは一体どうなってしまうのか不安になる。
このまま、この本を持ち出して…
うん。それがいい。
華南は素早く本を手に取ると、踵を返した。

「きゃっ」

グイッと引っ張られたポニーテール。

「その本持ってどこへ行く気だ」

おっ…起きていた?
驚きを隠せず、振り返る事も恐くて微動だにしない華南。
その様子を見て、不動は、掴んでいた黒い艶やかな華南の髪を離した。

「悪かった」

ぶっきらぼうに言った不動の声は、先ほどよりも優しく感じた。

「ずっと起きてた。来るのが遅いから、今日は来ないものだと思っ

た」

本当は、彼女が来るなんて思っていなかった。
少しくらい望みは捨て切れなくて残っていたが…
旧図書館のドアが掠れた音を立てた時、緊張している自分がいて。
こんなにも待ち焦がれている自分が滑稽過ぎて…

あぁ。俺は本当に彼女が

「好きなんだな」

無意識に出た言葉に、ハッと我に返った不動は頭を振った。
視界には、不思議そうに不動を見上げる華南の姿。

「……俺、カッコ悪いな」

ガシガシと頭を掻いて、本棚から下りて華南に歩み寄った。

「花園華南さん。初めて君を見た時から好きなんだ」

初めての告白に、不動は今の顔を彼女以外の人間には絶対見せられないと思った。

今まで生きてきて、初めて惚れた相手に告白した。

告白なんて女からしてくるものだと思っていたし来るもの拒まず、去るもの追わずの俺は、適当に合わせてその日限りの相手と遊んでいた。だから自分から告白したいと思える女なんて居なかったし、それに俺の周囲にはそう言う頭が空っぽの女しか居ない。

だからだろうか、元婚約者は会う度に俺を穢らわしいものを見る目をしていた。

別にこの婚約に不満があった訳でもなかった。相手もそこそこの家柄で、結婚すればより強い繋がりになり事業も良くなっていたかもしれない。けれど、向こうから願い下げだと告げられた。

今、目の前に居る人は何て言った？

初めて見た時から好きなんだ。

ぐるぐる頭の中で駆け巡っていく彼の言葉。

持っていた伊勢物語がガザっと床に落ちた。

嘘。なっ…何かの冗談よね。

だって、この高校の生徒はお金持ちばっかりで…わたしみたいな一般庶民なんて相手なんかしないはず。

「あっ…新手の嫌がらせですか」

華南は、しゃがんで手から落ちた伊勢物語を拾い上げながら言っ

た。
　だって不動なら有り得る。この伊勢物語も親切に取ってくれた。そこまでは良かった。けど、彼の口から出た言葉…『俺もこの本借りたい』
　わたしが課題で読まなければならないと前もって説明していてこの仕打ち。
　嫌がらせ以外の何物でもない。

「嫌がらせだと？！」

不動は、隠す事なく顔を歪めて華南の両肩を掴んだ。
あまりに突然だったので、華南はビクッと縮こまってしまい不動は、華南の肩を掴む手の力を緩めた。

「…嫌がらせじゃない」

「でも貴方は、この本を…」

不動は華南の華奢な腕の中に収まっている伊勢物語を見た。

「…あー…」

あの時の事を怒っているのか。

「あれは、君と会えたから…もう会えなくなりたくなかった。だから、その本を俺が持っていたら君は課題を仕上げなければならないから、ここへ必ず来るだろうと考えた」

「…………」

「嘘じゃない。君からしたらほとんど初対面だろうが、俺は君が中学三年の時から知っている」

華南の目線に合わせて、中腰になった不動は優しい眼差しで華南に返事を促す。

「……ごめんなさい。今はまだ混乱していて…」

「保留ってこと？」

「保留だなんて言ってません」

「俺は良いようにとる。絶対諦めないからな」

そう意地悪く口の角を片方だけキュッと上げて素早く彼女に自分の唇を重ねた。

「！！」

一瞬、何が起きたのか理解出来なくて、華南は目を見開いてスロ

ーモーションで華南から少しずつ離れていく不動を捉えた。

キスされた?!

徐々に頬が火照り出したのがわかり、両手で挟んだ。

それを見ていた不動は、嬉しそうに笑った。

「この本は、俺が預かっておく」

いつの間にか、腕の中から引き抜かれている事に気がついてあっ!と叫ぶが遅かったみたいで……またもや予鈴が鳴り始めた。

三話

あの告白以来、わたしは旧図書館へ行っていなかった。
行けなかったのだ。
寮内清掃が本格的に始まってしまい、昼休みは寮から一歩出れなくて勿論課題も一向に進展がなかった。

しかし何日か経ち秋休みに差し掛かった頃、生徒達は一斉に帰省してしまい夏美も帰ってしまい華南だけ残ってしまった。
流石に一人で清掃させるわけにはいかないと、秋休みの期間だけなくなった。
静まり返った寮内から出て、いつもは運動部で賑わうグラウンドの横を通り抜け旧図書館へとやって来た。
不動馨に告白されて返事はしなかったが、もう華南の心の整理はついていた。
返事、しよう。

まだ数回しか足を踏み入れ、不動との会話もそんなにしていないが、もうあそこは彼——との逢瀬の場所と言っても過言じゃないくらい、わたしの中で特別な場所になっていた。
別に、何かをするわけでもなく。
ただ静かな空間に不動と二人で居る。きっと緊張してしまうだろう。けれど楽しみであった。
秋休みといっても、十一月末から十二月の六日まで。
もう十二月に差し掛かり、最近ますます冷え込みが激しくなってきた。

華南は、羽織っているカーディガンの縫い目を合わせた。

十二月…冬休みを除けばあと一ヶ月で不動は、卒業してしまう。その現実を中々受け入れられなくて最近、少々寝不足気味だった。それを悟られないように、ゴシゴシと目蓋を擦り旧図書館の扉に手をかけた。

「やだ馨～ふざけないで」

少し扉を押して聞こえてきた女性の甘えた声。

「何でここが？」

「馨の隠れそうな場所なんてここぐらいでしょ」

「そうか。バレたのなら仕方ない。そろそろ潮時か」

「何が？よくわかんないけど、困らせないで。悔しいけど貴方が一番なんだもの」

チラリと、隙間から中の様子を見ると不動の長い脚の上に跨り、両手で彼の頬を持っている。

咄嗟に、扉から離れて…そして踵を返した。

嫌だ。ここに居たくない。
あんな優しい微笑み、見たことない。
今までの彼の表情が全部作ったものに思えてきた。

遊ばれていただけ？
お金持ちの娯楽か何かに？
だって、彼は言ったじゃない。

潮時だと。

もうきっと不動馨は、あの旧図書館には来ない。
わたしは、彼の何を見てきたのだろう。
浅はかだったんだ。彼に近づく事、自体が。
だって、わたしは徐々に不動馨の事を好きになってしまって行ったんだもの。

だから、彼からの突然の告白も嬉しかった。

「いい加減、降りろ玲夏。重い」

「叔父様ひどーい。啓くんへの対応もヒドいけどね」

「啓が、こんな所で玲夏が俺にじゃれついているのを見たら気分が悪くなるだろう？仮にも玲夏は啓の婚約者だ」

「はいは〜い」

軽く返事をした玲夏は、フレアスカートを翻して床に足をつけた。

「だって少しは、私の事を気にかけてくれてもいいのに。叔父様ばっかり。二人、デキてるんじゃないの」

「胸糞悪い冗談は止めてくれ。野郎に興味ない」

――――――

気がついたら、いつの間にか寮に居た。無我夢中でここに帰って来たんだと理解出来た。

時間も、夕方を回ってもう真っ暗になっていて…

「あっ…いけない。バイト！」

華南は、バイト用の鞄を持って寮から慌てて飛び出した。

一ヶ月に一回あるかないかの家庭教師。

実は、あのクラスメート達と打ち解けた直後、松田陽平が持ちかけて来たのだ。

「なぁ花園。お前って頭良いんだよな？特待生だし…」

「えっ？」

いきなりそう言われて戸惑ったが、夏美が背後から現れて付け足した。

「華南はすっごーく優秀でしてよ？常にテストの合計点数は三位以内に入っているのよ」

「へぇ！そりゃ凄い！なぁ花園。家庭教師してみないか？」

半年間続けたバイトの時給は県内で決められている最低賃金額。
ところが、松田陽平の話を聞くと時給二千円だと言う。仕送りも海外から送ってもらっているが、向こうでの両親の生活は厳しいらしく、ついバイトで何とかなるとエアメールを送ってしまった。
お金を稼ぐ大変さを学び、そろそろ体力的に保たなくなって来た。そんな最中の好条件な申し出を断れる筈がない。

一六時半頃に寮を出て、電車で五つ目の駅で下りた。
そこは、県内で有名な高級住宅街。

『じゃあ俺の弟の家庭教師頼むよ』
松田陽平は、自分の顔の前で両手を合わせて拝むように華南に言った。

「ここが…松田君の家…だよね」

純和風な佇まいに、ビクビクする。
木製の枠が何本も嵌った扉。横にスライドさせるものだろう。
それに手をかけて、ガラガラと音を立てて開けた。
丸い石畳が玄関先まで導く。あまりの広い庭で挙動不審になる。
テレビで見たことのある様な立派な庭園。
灯篭が立ち、大きな池には人一人が渡れそうな小さな橋がかかっている。
水面には錦鯉だろうか、鮮やかな柄を持つ魚が顔を出している。

「よっ」
背後から声をかけられて、咄嗟に振り返った。

「あっ…松田君！バイトの話、改めてありがとう」

「いや…吉住から色々聞いてたからな。んじゃ案内するよ。弟の部屋は離れにあるんだ」

「うん。弟さんってどんな子？」

「そうだな、少し…と言うか、かなり生意気だぜ」

「そう。会うのが楽しみ」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「うぅ…疲れた」

「お疲れさん」

車の後部座席に座り、松田は水の入ったペットボトルを手渡した。

「ありがとう。本当に松田君が言った通りやんちゃですね」

「何回も家庭教師に逃げられてさ～大変なんだ。けどアイツ花園の事、気に入った風だったから大丈夫だと思うな」

「うん。勉強になったら真剣に取り組めてたから…あっ…この辺で下ろしてもらっていい？」

学校の近くまで来て、華南は車から下りた。
夜道は危険だと、わざわざ運転席さんに車を出してもらったのだ。
「今日は本当にありがとう」
「いや…はいコレ。日払いだよな」
どっさり重い封筒を華南に持たせた。
「こんなに沢山、もらえない」
「母さんも弟同様、花園のこと気に入ったみたいでさ。気にしないで貰ってくれよ」
半ば無理やり押し付ける形で華南に渡した松田は、すぐさま車に乗り帰って行ってしまった。
華南は、分厚い封筒を見てからとぼとぼ寮へと向かう。
あ…—
やだ…誰か寮の前に居る。
黒い影が、華南を捉えて近づいて来た。
「…花園華南」
「っ！！」
街灯が、徐々にその姿を照らし始めて黒い影の正体がわかった。

「随分、遅いお帰りだな」

怒りを含んだ声音。

彼――不動馨の背後にどす黒いオーラのようなものが見えたのは錯覚ではないだろう。

凍てついた、眼差しに身動きがとれない。

「返事が保留の理由は…あの男子生徒のせいか？」

「松田君は…関係ない。それに…」

忘れかけていた光景がフラッシュバックする。

「それに？」

煽るように腕を組んで、ふんぞり返って聞いてくる不動に向かって

「…っだ、大っ嫌い！」

幼稚っぽい言葉だったが咄嗟に出たのは、それだった。

華南は、不動の不意を付いて駆け出して寮の敷地内に入った。

不動は、追いかけて来ているだろうか？

そんな訳ない。

華南は、振り返る事もせず寮内に足を踏み入れた。

ーーーーーーーーーーーーーー

バンっ！！

ガラス製のテーブルに叩きつけられた伊勢物語。

物に当たり散らす不動なんて見たことのない啓は、珍しくかけた伊達眼鏡をそっと外して様子をうかがった。

「くっそ…っ」

わしゃわしゃと髪を掻きむしる不動は、そうとう苛立っていた。

「…」

ドサッと白い革張りのソファに倒れ込んで、啓を見上げた。

「松田…陽平を調べてくれ。花園華南との関係を」

「また興信所ですか？イヤですよ」

「…さっき、松田陽平の車から下りて来たのを見て問い詰めた」

「ハァ…恋人でもないのに、どうしてそういう事しますかねぇ」

不動は啓の呆れた言葉に押し黙ってしまった。

「彼女に振り回されっぱなしだ」

あの告白以来、彼女は旧図書館へ現れなかった。

あの告白がまずかったのだろうか。

確かに性急過ぎたかもしれない。

でも、彼女の口から否定の言葉は聞いていない。
望みは多少なりともあると言うことだと自分に言い聞かせて、秋休みが始まってしまった。
花園華南は、両親が海外に居てる為、家に帰っても誰もいない。
だから彼女は寮で過ごしている。
「花園華南さん…以前、徹底的に調べ上げた時、恋人の‥こ‥の字さえ出ませでしたよね」
「以前って半年以上も前の事だ！今は居るかもしれないだろ」
血走った目で、部下を怒鳴る。
啓は頬を掻きながら、まずったな…と不動には聞こえない程度の声で呟いた。
翌朝、学校が始まる時間帯に目が覚めて、そろそろ焦りを覚え始めていた。
課題が全く手をつけていなかったのだ。
それもそのはず。不動馨が本を持っているから。
「もう…あの伊勢物語に執着してなんかいられない」
華南は、寮から飛び出して新図書館に向かった。

最初からこっちに来て借りておけば良かったのだと、今更後悔した。

でも、あの時は旧図書館の雰囲気が好きで行って不動馨と偶然会った。

「えーっと古典文学は…」

古典文学棚とシールの貼られた本棚を見上げた。

「なっ…ない？！」

あるのは、源氏物語と大和物語。

「そういえば…」

華南は、大和物語に手を伸ばして本を開く。

ペラペラと捲り、ある箇所で止まった。

「確か筒井筒、大和物語にも載ってるんだよね」

少しホッと息を吐き司書の元へ向かって借りる手続きを行った。

車の運転をしていた啓は、後部座席に聞こえるくらいの深い溜め

息を零した。

「…何だ？」

「いえ…ただ、この雰囲気が気まずくて」

「何を今更」

ハッと鼻で嘲笑った不動は、長い脚を優雅に組んで窓際に肘を起き、そして手の甲に自分の顎を乗せて言い放った。

「移動時は、常に二人きりだっただろ」

「さぁ…そうですけど…」

相当、花園華南と松田陽平の関係に苛々している不動に、啓はお手上げ状態だった。

「今から総会なんですから、無理難題をふっかけて顰蹙（ひんしゅく）を買わないで下さいよ」

「どうだろーな」

窓の外の景色から目を離さないまま、不動はぶっきらぼうに返事した。

長いようで短かった秋休みは、いつの間にか終わっていて何時も通りの学校生活が始まった。
勿論、寮内清掃もだ。

「華南〜はいお土産」

「華南さん！どうぞ召し上がってくださいな」

「花園さん！どうぞ」

席に座っていると、クラスメート達がわんさかと華南の元にやって来ては、秋休みで行ったのであろう旅行のお土産を置いていく。
ざっと数えても全員から貰ったと言っていいだろう。
あたふた戸惑う華南をよそに、夏美が抱えて来たものに、クラス中がざわめいた。

「華南！今年は私、質素に国内旅行でしたのよ！」

デェエンと机に乗せられたテディベア。机から大幅にはみ出すくらい大きなテディベア。

「ハウステンボスと言うオランダに似せたテーマパークとやらに行きましたの。中々楽しめましてよ」

「なっ…夏美…」

「あらやだ…気に入らなかった？」

その夏美のがっかりした表情を見て、華南は首が取れそうな程、ブンブンと頭を振った。

「こんな大きいテディベアがあるなんて知らなかった！　わたし、大好きなんだよテディベア」

ぎゅーっとテディベアの首に腕を回して抱きしめる。

「それなら良かったわ」

そんなやりとりの中、次の担当教員が入って来た。

「土産交換は終わったかー？　さー席につけー」

黒い表紙の出席簿を教卓の上でバンバンと叩き、騒がしい教室内を静かにさせる。

「そうだ、花園…秋休みの課題なんたが…」

「…はい出来てます」

華南は机の中から取り出して、教卓に持って行った。

「この通り課題、終わらせました」

「えっ…出来てる？…これを預かったんだが…」

華南の目の前に出されたのは、不動馨が持っていた伊勢物語。

「…先生…これ」

華南は、驚愕の瞳で国語科の教員を見て促した。

「ん、あぁ…太刀川代理理事が、わざわざ職員棟に持って来てくれたんだ」

「太刀川代理理事？」

その何も知らない華南に、教員は半ば呆れ気味な顔になり夏美に声をかけた。

「吉住…休み時間にでも教えてやれ。花園は勉強出来るんだが…天然っぷりは最強だな」

「そうですわね先生、そこは否定しません」

にっこり夏美は、微笑み華南は、戻って良い。と指示を受け伊勢物語を受け取り席についた。

伊勢物語が今、手元にある。もう飽きたからわたしに返した？やっぱり、あれは戯れ言だったんだ。

あんな真剣に言われたら、誰だって勘違いするに決まっているじゃない。釣れなかったからきっと諦めたんだ。

そもそも、彼にはあんな綺麗な彼女が居るのに、よく告白だなんて言えたものだ。

それにそれに…！

キスまでされてしまって！
今更になって、とんでもない相手を好きになっていた事に気がついた。
見目麗しいが性格はとんでもなく意地悪で嘘吐き。あの美人には見せる笑顔をわたしは一度も見たことない。
何で気づけなかったんだろう。
彼の遊びに。
「百面相」
その言葉に、ハッと意識が戻った。
「難しい顔したり怖い顔したり忙しいわね華南」
「ぅえっ？！」
「とっくに授業、終わったわ」
夏美の言葉に、あからさまに分かる程のリアクションをして机にうなだれた。
「その様子じゃ…何かあったと見ましたわ」
キラリと夏美の大きな瞳が光ったように見えた。
「寮内清掃時に…じっくり聞かせていただきますわ。でもその前に太刀川代理理事」
夏美は、華南の前の空いている席に座り、華南の顔を覗き込みな

がら言った。
「入学式にコメントしていたじゃない、機械的に。あの日、理事長が忙しくて来れないから代理として出席したって」
「あの時、それどころじゃなくて」
周囲を見回したらテレビで見たことのある著名人ばかりに目を奪われて、それどころではなかった。
一人キョロキョロして、庶民丸出しだったただろうな。と思った。
「それどころじゃない？どうせ華南の事、有名人に気を取られていたのではなくて？」
「ん、まぁ…それに近しいかな」
華南は曖昧に笑ってみせた。はっきり言って的を射ていたからだ。
「でも、どうして代理理事から伊勢物語なの」
「実はコレ…」
言い難そうな様子で口ごもる華南に、夏美は何かを悟ったのか、先に言った。
「さっきの百面相と関連してそうね。一緒に聞くことにするわ」

四話

午前中の授業は、何だかぼんやりしてしまいサッパリ理解出来なかった。
これは、エアコンの暖房が効きすぎだと言っておこう。
わたしと夏美は、四限目が終わると、食堂へ向かう生徒達とは逆の寮へと向かった。
実は寮内清掃が始まってから、わたしの部屋で昼食を作り夏美に振る舞っていたりする。
「今日は何を頂けるのかしら？華南はバリエーションが本当に豊富ね。私、インスタントラーメンしか作った事がないの」
つまり、このお嬢さまはインスタントラーメンを食したと言う事？！
華南的には、そっちの方が驚きだった。
寮の階段を上りながら、そんな話をして自室までやって来た。
「で…華南！一体全体何があったって言うのー」
夏美が玄関口へ先に入ってもらって、華南がドアを閉めたのと同時に夏美が振り返って必死の形相で華南を問い詰めだした。
「なっ…にがあったって…夏美、落ち着いて」
彼女を部屋に押しあげて…座椅子に座らせた。
「順を追って言うから落ち着いて聞いてね」

「えぇ！勿論よ」

華南は、この数日間に起きた出来事を話した。

旧図書館で、不動馨から好きだと言われてキスされた事から、わたしは頭が混乱して返事が出来ない。と、その場で相手に伝えたこと。

美人な女性と戯れているのを目撃したこと。

それから松田君の弟の家庭教師をしていること。

そして、松田君の車から下りて来たところを不動馨に見られてしまったこと。

「で、暴言を吐いたのね？」

「暴言ってほどじゃ……暴言になるんだよね」

大っ嫌い！と不動馨に言い放った。

凄く面食らった表情をしていて、その隙にあの場所から抜け出した。

「あの伊勢物語は、秋休み入る前に夏美に言ったでしょ？彼から共有しようって言われたって。でも、わたしが借りる予定だったものが返って来たっていう事は…」

もう終わったってことだよね。

「言っておくわ。旧図書館で会っていた美人は、不動馨の親戚よ。あの二人、兄妹みたいに仲良いの」

「！」

「何故、不動が華南に隠している事を言わないのかわからないけれ

ど…彼なりに何か理由があるのだと思うわ」

隠している事？
わからない。曖昧に言われても。
それに、夏美がどうしてそんなに詳しいのかも不思議。
でもきっと今、聞いたところで夏美は上手くはぐらかすんだろうな。

「でも、これだけは言っておくわ。相当、華南に入れ込んでるわね彼。華南も意地張ってないで返事してみたらどうかしら」

華南の話を聞くところ、そんな感じだ。
彼が遊びで、こんな細かい芸当するはずがない。
伊勢物語の共有発言も、華南との関わりを繋げとめておく為の糸口か何か…
あの不動馨が必死になっている様をこの目で確認してみたいわ。
ふっと軽く口から息を吐き出して、座椅子から立ち上がった。

「さっ！華南ッ。今日は私も手伝うわよ」

「ちょっ…急過ぎです！わわっ汚さないでー」

夏美が向かったキッチンの方へと追いかける華南。
そして何分後かに寮の一室から、高らかな笑い声と叫び声が響いていた。
華南の掃除をする量が増えたのは言うまでもない。
午後の授業も、ほとんど聞いていない状態で…
ただ漠然と時間は過ぎて行った。

「華南…華南ったら」

肩を軽く揺すられて肘をついていた腕が、ぐらついて華南は顔を上げた。

「華南、元気がないからって松田陽平が遊びに連れて行って下さるそうよ」

仁王立ちした夏美は、手際よく華南の鞄を引っ張り出して教科書類を無理矢理詰め込んだ。

「あっ…ちょ…」

「テスト前にパーっと遊びに行こうぜ！」

吉住夏美と松田陽平は、華南を間に挟み学校から連れ立った。
華南の予定では、松田陽平も言っていた通り、学年末テストが控えていた。
華南にとっては、特待生枠での進級なので大事なテストだ。
これで学年順位を落としてしまったら、特待生でなくなってしまう。
全てのテストで三番内の順位を修めること。
これが特待生枠で入学するルールだった。
もし上位から外れてしまうと、二年からは授業料等を支払わなければならない。

「だっ…ダメ！テスト勉強…しなくちゃ」

ハッと思考が戻った時には、既に校門の外。
黒塗りのベンツが目の前に止まっていて、陽平が先に乗り込み華南の手を引っ張る。

「…わたし、みんなと違って特待生だから、ノルマがあるの」

「あー…上位三番内だっけ？ ふざけたルールな」

「一番大切なテストの時期ですものね。華南ごめんなさい。軽く見ていましたわ」

しょんぼりする二人にいたたまれなくなった華南は、慌てて言った。

「二人は、わたしが元気なかったから心配してくれたんだもんね。ありがとう。その心遣いがすごく嬉しぃよ」

なんだか照れくさくて華南は、軽く肩を竦めてみせた。

「あっ…本、返却しないといけないから……また誘ってね？」

夏美に、しまわれたと思われる伊勢物語を鞄の中をのぞき込みながら華南は言い、二人が言葉を発する前に踵を返して再び学校へと向かって行ってしまった。

「どうする吉住？」

「なぁに？ 華南が居なかった解散？ 私じゃぁ不服ですの？！ 遊びに行くのでしょう？」

陽平は、ぐぐっと顔を近づけてくる夏美の絶対零度を顔面に浴びながら後ずさり、車内の奥へと座った。

そこへすかさず華南が乗り込むと、運転手に行き先を告げて勝手に走らせた。

一方、華南は旧図書館に伊勢物語を返却しに来ていた。
相手は居ないだろうと、思って図書館の扉に手を置いた。
グッと引っ張られる感覚が起こり、前へつんのめる。
スローモーションで視界に、見覚えのある姿が映った。
ハッと息を飲むより早く、腕を引っ張られて乱暴に館内に入れられ
直ぐ背後の扉は、大きな音を立てて閉まった。
ドンっと、その扉を背に押し付けられて、華南は堅く目を瞑ってい
た。

「……やっと会えた。毎日、ここに居た。伊勢物語、本当に申し訳
なかった。渡さないつもりじゃなかったんだ。…課題は出来たのか
？」

問いかけに、華南はこっくり頷いてみせた。
久々の声が懐かしくて体がゾクリと震えたのがわかった。

「そうか……それなら安心した」

「あの…テスト勉強があるんです」

振り絞って出した声は、自分でもわかるくらい震えていて。
華南は、自身の体をギュッと抱きしめて勇気を出して言った。

「だから、この手を離して」

捕まれた手首は、振りほどく事が出来ない。
力一杯に握られている訳でもない。
ありありと、男と女の力の差を見せつけられた。
華南が、そう懇願しても不動は、その手を緩める素振りは見せない。
「…色々、お互い勘違いしているらしい。でも俺の気持ちは変わらない。結構、気は長い方だと自負してる」
キザったらしくオーバーに肩を竦めてみせる不動。
彼だからこそ、違和感がないその仕草に、華南は掴まれていた手首が解けている事に気が付くのに少し時間を要した。
「待っていろよ。………いや待つのは俺の方か」
何のことを言っているのだろうか。
お互い勘違い？
わからない事だらけだ。

ちゅっ……――――

ふわりと柔らかい彼の髪が、わたしの額にかかり近づいた彼の綺麗な顔。
熱い温度を保った唇が、素早くわたしのそれに重なり離れた。
ワザと音を立てて――。
あっと声を紡ぐ前に、不動は華南より先に旧図書館から出て行って

しまった。

五話

『待っていろよ。………いや待つのは俺の方か』

頭の中で、ぐるぐる駆け巡る不動の言葉。
握っていたシャーペンが手のひらから滑り落ちると机の上で無機質な音を立てて転がった。

「はぁ…――――」

テストが間近で、こうして自室にこもって勉強しても、丸っきりはかどらない。
それどころか、頭の中は不動の事で一杯だった。
…本当に久しぶりに会った不動。
それに不意打ちのキス。
絶対会わない、会うことはないだろうと思っていた矢先に、バッタリ遭遇してしまい…
夏美が言っていた通り、以前の美人女子生徒は居なかった。
その事に、凄く安心している自分がいた。それに、鼓動が激しく高鳴ったのは言うまでもない。

あぁ。やっぱり、不動の事が好きで堪らないんだ。

――――――

テストまでの一週間は本当に短くて、テスト期間もあっという間に終わってしまった。
もちろん、三年生は既に冬休みに入っている。
秋休みが終わって一週間程学校に出席し、また直ぐに冬休みがやってくる。
三年生だけズルい気がしてならない。

そもそも、この私立学校は進学校な為、授業の進むペースが尋常じゃない。
その為に、三年生は夏休みが終わってからの後半は授業内容が全て終了しているので、殆どの生徒が大学受験に向けて自分の勉強をしている。
なので、寮にこもって勉強する者。
お互いに勉強し合う者も出てくる。
教室に来ないからと言って、欠席扱いにはされない。
なので三年になるとかなり優遇されるのだ。
冬休み明けも、年始挨拶の集会に顔を出して終わり。
次に出て来るのは二月中旬の卒業式だけ。
それまで、もう不動には会えない。と華南は感じていた。

「あっ…あんまりネガティブに考えないようにしよ」

ぺちぺちと両頬を軽く叩いて、席から立ち上がった。
そう学年末テストは今日が最終日だった。
テストからの解放からか、生徒達の顔はイキイキし迫る冬休みを期待に胸を膨らませていた。

「お疲れ様華南。テストの感触はどうでして？」

「うーん‥ちょっと自信ないかな」
ヘラっと笑ってみせた。でも本当に今回は自信がなかった。
これで、特待生規定の学年三番内以外の順位だと確実に自主退学しないといけない。
だって、授業料が払えないんだもん！！
徐々に顔色を悪くする華南に、夏美も最初は謙遜しているのだと思ったが、本気で言っているのだと思いフォローを軽く入れたが、あまり意味はなかった。
そこへ空気の読めない男子生徒が馬鹿みたいに騒ぎながら二人のところにやって来た。
「じゃーん！」
ドンっと華南と夏美の目の前に出された旅行パンフレット。
「冬休み、クラスでオーストラリア行こうって企画してるんだ」
松田陽平は、華南にパンフレットを渡して言い続ける。
「こんな寒い時期って無性に夏が恋しくなるよな！だから今、夏真っ盛りのオーストラリアに行かないか」
「行かないかですって？今は、それどころでは…」
「夏美、わたしの事は気にしなくていいよ。もうテストはおわったんだもん。それに結果はまだわからないじゃない」

「あっ…そうね。ごめんなさい。華南は順位落ちしたわけではないですものね」

「おいおい。それでどうするんだ？それからカウントダウンは向こうだからな！」

わたしは…と言いかけたところで、夏美に遮られた。
自分の中では、断る気でいた。
だって、そんな一週間以上もの間海外旅行だなんて、お金がいくらあっても足りない。
しかし、夏美はいつもの優雅な笑顔を見せて、心配しなくて結構でしてよ。と付け足した。

「じゃ…この用紙に名前書いて」

陽平は、二人に用紙を渡して記入してもらうと再びそれを回収して他の生徒達の元に行ってしまった。

「夏美！」

わたしは、抗議の視線で彼女に向けた。

「私の月のお小遣いで支払えてよ？気になさらないで」

「……う、う…」

住む世界が違い過ぎると華南は改めて気づいたのだった。

「…でも急過ぎて荷物の準備が大変だね」

「荷物？ そんなもの必要なくってよ？」

「え゛っ？！」

「必要な物は向こうで購入すれば良いだけのこと。パスポートと身、一つで行くのよ？」

華南は、空いた口が塞がらない。とは、この事なんだと痛感した。

クラスで海外旅行Ｉｎオーストラリア。
みんながみんな浮き足立っていたが、それは突然、現実に引き戻される。

冬休み突入一日前。

つまり、学年末テスト順位発表の日。
一年の廊下に、張り出された長くて白い紙。
そこにズラリと並んだ番号と名前。

三番内には、赤い花が付けられる。
華南と夏美は、それを見るために廊下へと飛び出して行った。

「凡ミスだな」
「はい。凡ミスですね」
少し笑いも含んだ溜め息。
しかし、それは嘲笑ではない事は啓にもわかっていた。
「この一年間、頑張っていましたよ彼女」
「それは俺も知っている。しかし、お前の好待遇とやらを信じていたが間違いだったな。特待生枠は、課題ばっかりだ」
「十分好待遇ですよ。ここの学費、普通の私立の五倍ですからねぇ」
「その分、日本のトップレベルの教師を雇い生徒に提供している。これくらいの見返りは当然だ」
「本当、お腹真っ黒ですね」
「お前が言うな」

啓は、読み取り難い笑みを零して、そっと用紙を差し出す。
書かれた内容は、特待生規定違反の文字。

「決裁をお決め下さい。特待生枠剥奪か、それとも…」

教室に戻って来た華南を見るクラスメイトの視線が突き刺さる。
夏美が横に居てくれたからこそ、なんとか自分の席に付く事が出来た。
順位は、五番だった。

五と書かれた数字の下に並んだ名前が、自分のものだと思いたくなかった。
二年生に進級する事は出来る。でも、授業料を払えるか否か。
静まり返った教室に、担任の教師が華南を呼んだ。

「職員棟に来てくれないか」

「はっはい…」

華南は手を握り締め、視線を一身に浴びながら教室から出て行った。

「どうなるんだろう花園さん」

「華南、辞めちゃうの？」

「そんなのまだ決まってないだろ！」

口々に飛び交う華南の今後の行方にクラス中が不安げに、顔を曇らせた。

職員棟に連れて来られた華南は、横部屋の小さな客間のような所に通された。

担任が出て行って直ぐに入って来たのは、以前夏美から教えてもらった代理理事の太刀川だった。

首からぶら下がったネームプレートに太刀川　啓と記載されていて、顔と名前が一致したのだ。

「初めまして、代理理事の太刀川です」

真っ黒のスーツをビシッと着こなした目の前に座る太刀川は、夏美とはまた違う優雅さを兼ね備えていてドキリとしてしまった。

「はっ…はじめまして」

深く頭を下げて、太刀川から、どうぞ。と再び腰かけるように促された。

「早速だが、なぜ君がここに呼び出されたか…解るかな？」

「…学年末テストの順位が落ちてしまったから…ですよね」

「いかにも」

その一言に、華南は泣きたくなった。
今年一年間が、走馬灯のように頭をよぎった。

「あの、わたし二年生に進級しても授業料を支払える財力が家にはありません。なので、自主退学をさせて下さい。

言い切る前に、太刀川が遮った。

「いえ…一応、特待生規定では、全てのテストで順位三番内の成績

を修めよ。と在りますが、あまりにも酷だと、理事長が規定から削除したので花園さんは進級出来ますよ。勿論、特待生てして」

「えっ…」

「それに、今回初めての特待生導入に、こちらも色々と試行錯誤中でねぇ」

「…」

「そういえば…花園さんのクラスは、冬休みオーストラリアに行くようだね」

華南の頭の整理がつく前に太刀川は、膝の上で手を組み合わせて華南を直視しながら言ったのだ。
その太刀川の質問にコクリと頷く。

「君も参加なのかな？」

「はい…」

「そう。ではこれを」

妖しく光った瞳は、この目の前に出された大量の用紙を隠し持っていたからなのだろう。

「理事長が、その海外旅行の話を小耳に挟んでね。特待生枠剥奪の代わりに、『今年一年間を振り返って』を題目に感想文を書きなさ

い。と指示がありました」
「これ、全部ですか？」
「そこまで鬼じゃありませんよ。四百字詰め、そうですねぇ十枚でいいでしょう」
太刀川は、大量の束になっている原稿用紙を十枚数えて、華南に手渡した。
「良かったですね。冬休みに課題が出来て」
華南は、受け取った原稿用紙を見て、太刀川を見た。
とても楽しそうな表情をしている。
華南は、肩を落とした。

ーーーーーー

「彼女、お金もないのに海外旅行に行くなんて、信じられないですよ」
突然、理事長室に入って来た太刀川は、持っていた書類を木目調のテーブルにドサッと置いた。
部屋の奥に、一際大きい木製の机でパソコンを操作する太刀川の上

司は、視線を画面から外すことなく言った。
「吉住夏美が彼女の面倒を見るそうだ」
「小耳に挟んだって…吉住さんに聞いたんですねぇ」
「いや、吉住から携帯に電話が入ったんだ。花園さんの学年末テストの結果について」
太刀川は、あぁ！と大げさに声を上げて未だにパソコン画面を見続けて、仕事を続ける彼に向かって言う。
「吉住夏美さんは元婚約者でしたね」
「あ？遠い昔の話だ。花園さんに非はない。そんな風に彼女を軽蔑しないでくれ」
「はいはい。少しからかってみただけですよ」
ニコニコ微笑み太刀川は、テーブルに置いた書類に目を通し始めた。

教室に戻ると、一斉に視線が華南に注目した。
今日は、学年末順位の結果を知る為の出席なのでホームルームを一時間程してから寮へ戻る予定らしいが、まだ続いているホームルームに少し気まずい状況になりながらも教室に入った。

「華南っ…！！」

不安そうな声を出す夏美に、華南は大丈夫だよ。と伝えた。
担任教師も、知らないらしく華南に言う。

「花園、太刀川代理理事には何て言われた？やっぱりダメだったのか？」

「いえ…みんなにも心配かけたんだけど、無事に特待生として進級出来るみたいです」

その華南の言葉に、クラス中が安堵した。

「三年間ずっとこのクラスだもんな」

「やっぱり一人でもクラスから欠けたらイヤだもんね」

「良かった良かったー」

口々に飛び交う暖かい言葉に目頭が熱くなった。

「じゃあもう気にせず旅行に行ける！」

松田陽平は、握り拳を高々にかかげて言うが、華南はサッと手に持った原稿用紙を見せた。

「せっかく誘ってもらったんだけど、進級出来る代わりに課題が出たの」

「げっ…本当か？」

「こらこらもうホームルームに戻るぞ。終わってから話し合えー」

収拾がつかなくなりつつあるので担任教師は、話を戻した。

「さっきの話の続きだが、三年生の卒業式に参列するメンバーだか、クラス委員長と特待生の花園に決まったからな」

いつの間にか、そう言う話になっていて華南は驚嘆した。

以前、どこかで耳にした時は全学年が卒業式に参列すると。それがどうだろう。自分が選ばれるだなんて。

でもこれは凄く良い機会かもしれない。
そう思った時、自分の心は決心していた。

不動に自分の想いを伝えようと…。

わたしは、冬休み直前に課題が出て内心ホッとしていた。旅行代金をクラスメイトに出してもらうだなんて、そんな厚かましいこと出来なかったからだ。

だから、とっさに課題があるから旅行は無理だと、みんなにわかってもらえる様に伝えた。

その後すぐに担任教師から、その話は終わりだと断ち切られてしまったが終業後に夏美の言ったアノ一言で、わたしは今オーストラリアに居る。

「ねぇ華南？課題課題って言っているけれど、別に旅先に持って行っても邪魔にはならないわよね？」

あの時の、ひらめきに満ちた夏美の笑顔は例えようがない。

「おーい花園！ボーっとしてると飛行機にひかれるぞ」

ボケーッと呆けている華南を見て、陽平は声をかけた。
初めて乗った飛行機に華南は感動に浸っていたのだ。
専用ターミナルへ向かう途中の通路をゾロゾロ歩いている華南のクラスメイト達。
以前提案してきた松田陽平宅の自家用ジェットに乗って来た。

さすがお金持ち学校と言うだけの事はあった。
ターミナルに出てすぐに待機している白いリムジン。運転手がドアを開き、そこに颯爽と乗り込む皆。
所作が慣れている！と華南は驚きっぱなしだ。
「華南こっちこっち！」
少し遅れて松田と出て来た華南を見つけて夏美は呼んだ。
「松田がトロいから他の車が、もう出てしまっていてよ？」
「むっ…」
「夏美ごめん。松田くんは悪くないよ。わたしが、ボーっとしてたの」
松田が、夏美に非難されているのに気づいた華南は、自分に非があることを伝えた。
「あら？何のことかしら？さっ、今からグレートバリアリーフの見えるホテルに向かいましょ」
くるりと髪を踊らせてリムジンへと乗った。
「本当、花園はあいつのお気に入りだな。ま、俺も花園のこと好きだけどな」

ポンと華南の背中を押しながらさらりと、そんな事を言う松田に困惑した。

きっとそんな深い意味ではないと。自分は自意識過剰なのだと思うことにした。

シンっと静まる校舎。冬休みに入ったのだ。その中でカタカタとキーボードを打つ音が、薄暗い廊下に響いていた。

「この長期外泊届けに花園さんの名前がありますよ」

華南のクラスの担任教師が集めてきた書類が代理理事の元に集まる。一応重要書類に指定されている為だ。

太刀川は、ペラペラと数枚ずつ内容を確認しながら見ていると、先日課題の出された華南の長期外泊届けが目に留まり呟いた。

打っていたキーボードの音は鳴り止み、椅子から立ち上がり太刀川に近づく足音。
「コレはアレか？男女で行ったのか？」
少し声音が低い気がした太刀川は、慌てた様子で他の届けに目をやる。
「…そうみたいですねぇ…ほぼこのクラス全員が参加しています」
「ふぅん」
腕を組んで考える素振りになり、そして何を思い立ったのかノートパソコンを片付けてハードケースに直す。
そして言った一言、それは
「行くぞ。オーストラリアに」
「……何もそんな急に」
「側に、松田陽平が居る！冬休み中、一緒なんだぞ？！何か変な気でも起こしたらどうする！」
悪態をつきながら、理事長室から出て行ってしまった。
部屋の主が居なくなってしまい、静寂が訪れた。
「花園さんは、まだ貴方の恋人でも何でもないじゃないですか。それなのに何故そこまで執着するのですか……不動理事長」

開きっ放しの理事長室のドアを見つめながら誰に向かうことなく声を発した。
駐車場に向かう不動に追いついた太刀川は、赤外線で車のロックを外してドアを開ける。
滑り込むように車内に入り、太刀川は運転席へと乗った。
エンジンをかけて直ぐに、太刀川は不動に聞いた。
「以前にも言いましたよね？恋人でもないのに。と」
太刀川は、運転をしている為に前方を向いたまま不動に話かけた。
「何故、そこまで花園さんとやらに執着するのですか？」
「……理屈じゃないんだ。横断歩道で彼女を見た時、純粋に恋をしたんだ」
窓枠に肘を乗せて顎を手の甲に乗せて、流れる景色を目で追いながら呟くように言い始めた。
「今までの俺じゃ考えられないだろ？でも恋人じゃないからこそ執着するんだよ」
「じゃあ恋人同士になったら冷めるのですか？そういう狩猟本能な人、居るじゃありませんか」
「何で俺を凝視しながら言う。危ないだろ、前を向け」
「いえ？」
太刀川は、ハンドルを握り肩をすくめた。

「今までの俺は、そうだったかもしれない。今、思えばいつも危ない橋を渡っていたな。…でも彼女は違う！恋人同士になっても、冷める事は有り得ない。むしろ周囲が見えなくなるくらい燃え上がっている事だろうよ」

言葉とは裏腹に、それは穏やかな表情で、不動は太刀川に言った。

「彼女と居ると、そうやって未来のビジョンが見える。結婚して子供が産まれ家庭を築く…とても温かい家庭。今まで付き合って来た頭の空っぽな女相手に未来なんか見えない」

だから、彼女を見た瞬間。
あぁ、この娘（こ）なんだと、心の中で感じた。

「……歳が離れ過ぎていて、ロリコンだと思うか？」

「いえ…」

「あぁ、お前は冷夏の婚約者だったな。俺と同類だ」
嫌みなくらい整った顔立ちの不動は、口端を上げて微笑んだ。
「知れています。一回り違うくらい」

初めての海外旅行も何事もなく数日が経っていた。
みんな、お金持ちの方々なので、買い物に必死だったり人の多い海で泳ぐのに夢中になっているハズもなく、ホテルのエステ施設に行ったりプライベートビーチに向かったり…

「…わたしも松田君の船でホエールウォッチングに参加したら良かったかも」

華南が朝食をとっている最中に、松田は誘ったのだが夏美に『食事の邪魔をしないでもらえる？』と言われてしまい、何も言えずじまいで立ち去って行った。
後々聞いたら、そのホエールウォッチングに行ったそうだ。
キツい一言を松田に投げかけた夏美は、今はエステ三昧。
そして今、華南は夏美の言い付けでホテルの一室で待機中だった。

「言い付け通り、わたしに会いたがっている人を、ここで待っているんだけど」

物好きな人だと。内心溜め息をこぼした。
何度目になるかわからない溜め息を吐いた時、室内にノックの音が響いた。
うなだれていた華南は、ぴくりと顔を上げてドアの方を見た。

「はっ…はい！今、開けます」

ドアに向かうと鍵を開けて、ゆっくりドアを押した。
足元から広がる視界が、徐々に上半身へと見ていく。
黒いストライプの入った細身のスーツ。
男性だと、わかった瞬間———身を縮ませてしまった。
いくら高級ホテルに宿泊していても、ここは海外。
何が起こるかわからない。
散々、夏美にドアを開ける時は覗き窓を見るか、チェーンを付けておきさないよ！と言われていたが、すっかり両方共忘れていた。
そんなに言うのなら夏美も一緒に残ってくれたらいいのに。と理不尽さに憤っていたからだろうか。

「元気そうだな」

頭に降ってきたのは、あの不動馨だった。
一瞬が、恐ろしく長く感じたのは、これが初めてだった。
ポカンと顔を上げて、不敵に微笑む不動に見入っていた。
「なっ…ど…まさか、夏美の言ってた…わたしに会いたがっている

人‥って」

言ってから、瞬時に口を抑えた。
なぜなら、目の前に立っている不動が‥わたしに会いたがっている人‥ではなかったら…何て自分は先走って自惚れた事を口走っているんだろうと毒づいた。
しかし、裏腹に驚きと嬉しさに心臓が早鐘を打っている。

不動の返事がなかなかなくて、上目使いがちで彼の言葉を待ったが、ふと、不動の意識が中途半端に開けられたドアに移り、それからドアノブを掴んだ逞しい腕は、グイッと引っ張ってきた。

「わっ…」

華南も、力なく持っていた為にノブが滑るように手のひらから消えて、代わりに不動が大きく一歩部屋へと足を踏み出し、体を割り込ませて来たのだ。
そして、軽く華南の肩を押しやり後ろ手にドアを閉めた。
「君が言った通り、会いに来た。あんまり嬉しそうには見えないが…」

「！！」

会いに来た？わたしのために？

彼を…不動を信じてみようって思ってた。

自分の中で、タイミングを計って声を振り絞って発した。

「「あの…！」」

見事に被った言葉に、お互い目を見開き見つめ合う。

「…君から言いなさい」

優しく言う不動に、ふるふると頭を振った。
それを見た不動は、そうか。っと呟き言う。

「ここに、邪魔者もなく、来れたのは全て吉住さんのお陰だ」

邪魔者…
不動は誰のことを言っているのか華南には、わからないが夏美の、わたしからみんなを引き離すのが必死だった様を、今更ながら思い出した。

「…ありふれた言葉だが、ずっと好きだったんだ。君がクラスで旅行に行くと聞いて、居ても立ってもいられずに俺が来てしまうぐらいだ。この旅行が女子生徒のみだったら…嫉妬に狂うことなんてなかっただろうに」

ふっと、顔を隠すように横を向いた不動の横顔は、少し火照っているように見えた。

「本当に？」

「冗談に見えるか？生まれて初めての経験だ！君には、結婚を前提に付き合って欲しいくらいなんだ」

誰にも触れられたくないんだ。自分のだと…
不安な気持ちで、華南を学校に通わすのではなくて、自分と繋がりがあるのだと。みんなに知らしめたい。

「…ありがとう。凄く嬉しい。でも、受験で忙しいのに、邪魔したくない」

あ――――…そうだった。

華南は、俺の事を来年三月に卒業する三年の先輩だと思っているのだった。
吉住夏美に言われていたな。

「心配いらない。俺は随分前に、高校も大学も卒業した」

えっ――――……

今、何て…？

ポカンと、情けなく口を開けて見上げる華南が面白くて自然に笑みがこぼれた。
まさか自分が、こんなに感情的になったのも彼女のお陰なのだろうか。

「俺は、不動馨。私立高等学校の理事長だ」

「なっ…」

この目の前に立つ、どう見ても自分より一つ二つ年上にしか見えない男性が、超多忙で滅多に見ることの出来ないアノ理事長？！

「花園華南さん…混乱していると思うが、返事を聞かせて欲しい」

ゆったりとした動作で、華南の両手を掴んでぎゅっと握った。

わたしの気持ち、わかっているくせに。堅く目を瞑って華南の手を握り、整った顔を近づけている不動を見つめて荒くなっていく呼吸と、早鐘を打つ心臓を落ち着かせる為に、大きく息を吸った。

「……好き」

自分でも驚くくらい、この言葉に甘やかさが含まれていて華南は恥ずかしくなった。

目を見開いた不動は、握っていた手を離して、力強く華南を抱きしめた。
スーツの上からもわかるくらいの厚い胸板に顔が火照っていくのがわかった。
そして、どちらの音かわからないくらいに互いの心臓の音が響く。
暖かい、彼のぬくもりに身を預けていると、パッと身を離した。

「…行こう」

不動は、そう言って手を差し出した。
どこに？なんて思わなかった。戸惑いも。
自然と顔がほころび、その手に重ねた。

「年越しは、二人で過ごそう。静かなところで」

悪戯っぽく言いながら、華南の頬に唇を落とした。

終

あとがき

サイトの三万打記念小説。
もうすぐ四万打なんですけど…本当に申し訳なさでいっぱいです。
たくさんの拍手やらコメントをいただいて返信しきれていないない状態ですが、時間がある時にでもぽちぽちぽち返信させていただきます。

今回、華の箱庭のラストは卒業式に理事長が登場して、出席していた華南にバレる。っていうラストだったんです。
それがどう転んでなのか、バカンス中に不動の方から正体を告白って形に持っていきました。
また別の機会に華南が不動の元婚約者と喧嘩しちゃう話を書こうかなーと考えてます。
予定は未定です（爆）

それでは、次の作品で！

09・05・14

真羅　拝

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2848o/

華の箱庭

2010年10月22日05時29分発行